

僕は○○○○○○○○

中 相作

はじめに伏せ字ありき

「こんにちはッ」

「はいどうもこんにちは」

「県民に○○○○を押しつける男ッ」

「藪から棒になんですねん」

「三重県知事の鈴木えーけーでございますッ」

「なんでこんなところに知事さんが出てくるんですか」

「これが漫才の高等テクニク」

「どこが高等ですねん」

「初心者にはついてこれないかもわかりませんが」

「だいたいその○○○○ゆうのはなんなんですか」

「一般的には伏せ字と申しまして」

「伏せ字といいますと」

「戦前には本とか雑誌とかでようあつたんですけど」

「どんなことしますねん」

「都合の悪い言葉を○とか×で置き換えるんです」

「読めなくしてしまうわけですか」

「たとえば性的に露骨な言葉とかですな」

「テレビのバラエティ番組でゆうたらピー音ですか」

「まあそうです」

「放送したらまずい実名とか放送禁止用語とか」

「テレビではピーゆう音で聞こえんようにしますけど」

「昔の印刷物では○とか×の伏せ字で隠してました」

「そしたらさっきの知事さんの○○○○も都合が悪かったんですか」

「そもそも悪いわるい死ぬほど悪い」

「都合悪いのやったらいわへんだらよろしがな」

「それでは漫才になりません」

「けど意味がわからな漫才になりませんがな」

「こんにちはッ。県民に○○○○を押しつける男」

ッ。三重県知事の鈴木えーけーでございますッ」

「せやから意味がわからんゆうてますがな」

「しかし『伊賀百筆』もだいぶご無沙汰でした」

「ほんまですわね」

「以前にも編集部から声をかけていたただきましてその気にはなつてたんですけれど」

「なにかあつたんですか」

「天の時と地の利と人の和が整いませんでした」

「漫才でそんなたいそうなものなんですわ」

「いつのまにかただ時間だけが矢のように」

「光陰矢のごとですか」

「日も暮れよ鐘も鳴れ」

「なんですわねん」

「月日は流れわたしは残る」

「それ歌の文句かなんかですか」

「アポリネールの『ミラボー橋』を堀口大学の訳でお届けしております」

「外国の詩ですか」

「ミラボー橋の下をセーヌ河が流れ」

「パリの話ですわね」

「新町橋の下を名張川が流れる」

「パリのどこに新町橋がありますわねん」

「これが漫才の高等テクニク」

「それはもうええわねん」

「それでこの漫才なんですけれど」

「『伊賀百筆』でまたやらしてもらおうわけですわね」

「以前その気になつてちよつとだけやった漫才から始めてみたいと思います」

「以前ちよつとだけやった漫才といえますと」

「二〇一〇年十二月に出た第二十号用の漫才でした」

「そんな古い話もうええのところがいますわ」

「けどそこから始めないと話がつながりません」

「そらまあ話の流れゆう問題もあるでしょうから」

「ですからいったん二〇一〇年にバックしまして」

「そこから再スタートしてまた現在に帰つてくると」

「そうゆうことです」

「ややこしい話ですな」

「以前の漫才は『テロになるまで待てない』ゆうタイトルでした」

「ずいぶん物騒なタイトルですけれど」

「なんやつたら『〇〇になるまで待てない』ゆうことにしましよか」

「伏せ字はいいですから」

「こんにちはッ。県民に〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を押しつける男ッ」

「それもええわねん」

テロになるまで待てない

中 相作

ぼやき漫才リターンズ

「おらおらおらおら」

「なんですねん出てくる早々」

「おらおらおらおらあッ」

「せやからどないしたんですか大きな声で」

「怒号といえますか罵声といえますか」

「なんでいきなり怒鳴らなあきませんねん」

「きょうの漫才はおらおら路線となっておりました」

「どんな路線ですねんそれ」

「先日公開された北野武監督の『アウトレイジ』みたいな感じでしょうか」

「君あの映画もう観たんですか」

「予告篇だけは完璧に」

「それでは観たことになりませんがな」

「椎名桔平さんもおらおら路線全開の熱演でした」

「そらそうゆう役でしょうからね」

「ですから僕も桔平さんみたいになりたいなと」

「無理ゆうたらあきませんがな」

「たしかにかなりの無理はあるんですけど」

「わかっているのやったら潔く諦めたらどうですか」

「しかし気合を入れることも必要です」

「なんで気合が必要ですかねん」

「なにしろ僕らが『伊賀百筆』で漫才やらしてもら

るのは六年ぶりのこととして」

「あれからもう六年ですか」

「忘れもしない二〇〇四年のことでした」

「三重県が伊賀地域で官民合同事業をやりましてね」

『生誕二六〇年芭蕉さんが行く秘蔵のくに伊賀の蔵
びらき』ゆうあほみたいな名前の事業でしたけど」

「あほみたいなゆうたらあきませんがな」

「けど事業の関係者全員があほでしたから」

「そんなことゆうてたらあかんゆうのに」

「もちろん僕かて伊賀地域住民全員があほであるとうてるわけではないんです」

「そんなこといえるわけありませんがな」

「ところが伊賀の蔵びらき事業の場合は関係者全員が見事なまでのあほでしてね」

「あほあほゆうなゆうてますねん」

「でもげんにみんながあほやったせいで事業は目もあてられんほどの大失敗に終わってしまいました」

「たしかにいろいろ問題があつたみたいですけど」

「ですからあの年に出た『伊賀百筆』第十三号」

「この雑誌で初めて漫才やらしてもらいましたね」

「事業に携わっていた官民双方のあほを漫才でええだけ叱り飛ばしたつたわけですけど」

「君なんでそこまで偉そうやねん」

「不思議ふしぎあら不思議」

「どないしました」

「関係者の誰ひとりとして僕のゆうことを聞つきよりませんでした」

「君が誰からも相手にされてないゆうことですがな」

「僕はまともなことしかゆうてなかつたんですけど」

「君の考えがそのまま関係者に受け入れられるとはかぎりませんからね」

「聞く耳をもたないゆうのがそもそもあほの証拠なんです」

「そんな決めつけるようなことゆうたらあかんがな」

「ですから前回以上の気合をこめて叱り飛ばしたらどんならんなど決意をいたしました」

「漫才やるのに決意が要るんですか」

「おらおらおらおらおらおらおらおらあッ」

「やかましいだけやないか」

「とにかく椎名桔平さんみたいになりたいなど」

「無理やゆうてますやろ」

「いずれにしても万感こもこもこの胸に秘めながらひさびさの高座に立つてるわけなんです」

「漫才やるのはほんまにひさしぶりですからね」

「最後にやったのは三年前のことになります」

「どんな漫才でした」

「二〇〇七年の七月に僕は名張市の監査委員に住民監査請求を提出したんですけど」

「そうゆうたら君また例によつてあほなことやつてましたな」

「あほ相手にあほなことやつてほんまにあほみたいな話なんですけど」

「すぐにあほあほゆう癖なんかかなりませんか」

「監査請求の参考資料として提出した『僕の住民監査請求』ゆうのが僕らの最後の漫才でした」

「長い漫才でしたねあれは」

「いまでもインターネット上にありますからタイトルで検索してもらったらいつでもお読みいただけます」

「あれインターネットに発表したんですか」

「そうゆう時代ですからね」

「いまやインターネット全盛ですから」

「とにかく紙媒体の舞台が激減してますからね」

「紙媒体の舞台ゆうたら雑誌のことですか」

「雑誌の休刊廃刊があいついでます」

「これも時代の流れですかね」

「僕らの初舞台は『四季どんぶらこ』ゆうとこやったんですけど」

「名張市で発行されてた地域雑誌ですね」

「僕らの漫才は面白くてためになると大評判で」

「どのへんがためになるんですか」

「ところがしばらく前に廃刊になったうえ」

「まだなんかありましたか」

「『四季どんぶらこ』の編集兼発行人やった川上弘子さんがお亡くなりになりました」

「そうでした。去年六月のことでしたか」

「あらためてご冥福をお祈りしたいと思います」

「僕らもずいぶん可愛がっていただきました」

「それで僕らはホームグラウンドを失ってしまったわけなんです」

「定期的に漫才やる舞台がなくなりました」

「ところが今回『伊賀百筆』の舞台にふたたびお招きをいただきまして」

「ありがたいことですねほんま」

「こうなりますと気になることはただひとつ」

「なんですねん」

「『伊賀百筆』はいつまでもつか」

「そんな不吉なこと気にしたらあかんがな」

「でも地域に根ざした雑誌というのは地域社会にぜひとも必要なものですから」

「いくらインターネットの時代になったゆうてもね」

「地域雑誌『伊賀百筆』のますますのご発展を心からお祈り申しあげまして」

「なんの挨拶ですねん」

「帰ってきたばやし漫才の挨拶といたします」

「またえらい行儀のええ出だしですけど」

「おらおらおらおらおらおらおらおらあッ」

「それはええねん」

人われをだあほと呼ぶ

「さて今回の漫才のテーマは何か」

「まだ決まってもせんのか」

「編集部からはここで江戸川乱歩騒動のことを記録しといたらどうやお話をいただいでるんですけど」

「江戸川乱歩騒動といいますと」

「名張市に乱歩の生誕地碑がありまして」

「ちよつと前に広場として整備されましたけど」

「以前は榊田医院第二病棟ゆうのが建つてました」

「その中庭に生誕地碑があつたわけですね」

「その病棟の土地と建物が所有者である榊田敏明先生のご遺族から名張市に寄贈されました」

「乱歩のために活用してくださいゆうことで」

「ところが結局はあのだあほです」

「ざまゆうこともないでしょうけど」

「僕ときどき人から怒られますからね」

「なんちゆうて怒られるんですか」

「だあほッ。このだあほッ」

「そらまあたしかにどあほでしょうけど」

「名張市におまえがついていながらなんであんなことになつてもたんや」

「つまり君が役立たずやったゆうて怒られると」

「だあほッ。このだあほッ」

「それはわかりましたから」

「たしかにあの榊田医院第二病棟跡地活用事業は目もあてられんほどの大失敗に終わりました」

「目もあてられんことが多いんですな」

「なかには広場として整備されたことを高く評価する名張市民もいますけどね」

「どんな評価があるんですか」

「さつぱりしてよかつたですわて」

「そら閉鎖された古い病棟が建つてるよりは広場のほうがさつぱりしますけど」

「でもこれはさつぱりするとかせんとかそうゆうレベルの問題ではないですから」

「名張市が寄贈していただいた乱歩ゆかりの場所をどう活用するかという問題です」

「それが大失敗に終わつてしまいましたので」

「少なくとも大成功とはいえないでしょうね」

「せめて大失敗の経緯をつぶさに記録しといたらどうやというのが編集部の意向なんです」

「そしたらそれがきょうの漫才のテーマですか」

「ところがひとつ悩ましい問題がありました」

「なんですすねん」

「どこから話を始めるべきかが悩ましい」

「どうゆうことですか」

「いろいろな事情が重なってますからね」

「いろいろな事情といえますと」

「榊田医院第二病棟の跡地整備は名張市のまちなか再生事業の一環として進められたわけです」

「あの事業もなんやわけのわからんままうやむやになつてしまいましたけど」

「目もあてられない大失敗に終わってしまいました」

「たしかに目もあてられない感じですね」

「二〇〇五年に名張市がまちなか再生委員会ゆうのを発足させまして」

「いわゆる官民協働組織ですな」

「さあまちなかの再生を進めましようゆうことになつたんですけどこれが迷走に次ぐ迷走で」

「君が提出した住民監査請求もまちなか再生事業からみのことでした」

「そうです。聞いたこともないような民間団体が三重大学のなんとか研究室と委託契約を結んでまして」

「ところがその研究の対価約百五十万円が名張市民の税金から支払われてたわけですね」

「ですからそらちよっとおかしいやろと」

「監査委員に監査をお願いしたわけですね」

「ところが監査の結果は驚くべきものでした」

「どんな結果やつたんですか」

「なんの問題もありませんゆうよなことでした」

「えッ」

「協働だからいいんですみたいなことでした」

「えーッ」

「目を疑うような結果が返ってきましたね」

「それはちよっとおかしいのところがいますか」

「明らかにおかしいんですけどあの事業に関してはまだまだいっぱいおかしなことがあります」

「再生委員会自体もおかしなことになりましたし」

「官民協働組織である再生委員会から名張市が脱退してしまうという異常事態に発展しました」

「去年の秋のことでしたけど」

「名張市が発足させた組織を名張市が解散させるゆうのやつたらまだわかるんです」

「解散やなしに名張市が自分から引いたんですから」

「ようそこまで主体性を放棄できたもんですね」

「感心しとる場合やないと思いますけど」

「だあほッ。このだあほッ」

「どあほは君やないか」

「ですから榊田医院第二病棟跡地活用事業の大失敗について語ろうと思ったらまちなか再生事業の大失敗についても語らなければならぬわけなんです」

「しかもそれだけやないんです」

「まだなんぞあるんですか」

「伊賀の蔵びらき事業」

「あの事業にも関係があるんですか」

「官民合同とか協働とかお役所があほなことを前面に押し立て始めたのがだいたいあのあたりですから」

「べつに悪いことやないと思いますけど」

「きれいごとの理念だけ見たらそう思いますけど」

「実際には違うんですか」

「官民の協働ゆうやつには法則がありました」

「どんな法則ですか」

「あほはあほとしかつるまない」

「君ほんましまいに叱られるで」

「けど事実が証明してますから」

「事実といえますと」

「たとえば伊賀の蔵びらき事業では三重県という官のあほが伊賀地域住民という民のあほを総動員したあげく見事にこけてしまいましたからね」

「こけたゆうてもいろいろ事業はありましたかな」

「ひとりよがりなご町内イベントをひたすら寄せ集めただけゆうのがあの事業の実態でした」

「たしかにその場かぎりのイベントが多かったみたいですけど」

「まちなか再生事業かて官民双方のあほがつるんで大失敗の道をたどったゆうのが基本的な構図でしたし」

「基本的な構図はいっしょやったゆうことですか」

「官民協働の悪しき構図が伊賀の蔵びらきからまちなか再生へしつかり受け継がれていたわけですよ」

「それ漫才にするとなったらえらいことですがな」

「そもそも榊田医院第二病棟跡地活用事業の大失敗について語ろうと思ったらまちなか再生事業の大失敗について語るとともに伊賀の蔵びらき事業の大失敗についても語らなければならぬわけなんです」

「大失敗だらけですがな」

「けどいくら語っても意味がないような気もしてきま

すしね」

「なんでですねん」

「関係者の誰ひとりとして僕のゆうこと聞つきよ

せんから」

「それは君が嫌われ者やゆうことですがな」

「どないしました」

「えらいもんですね実際」

「なんのことですもん」

「この漫才が始まったのは二〇一〇年のことでした」
「それがなにか」

「最初に『アウトレイジ』のことが出てきますけど」

「北野武監督の映画の話題でしたね」

「えらいもんでその続篇の『アウトレイジビヨンド』
が去年の十月に公開されましたからね」

「それがなんでえらいもんですか」

「漫才始まったときにはほやほやの新作やった『アウトレイジ』の続篇がとつくにできてからようやく漫才のつづきにとりかかるわけです」

「そらまあ長いことほったらかしでしたから」

「あッというまに時間が過ぎてしまいましたね」

「せやから『あッ』ゆうたんですか」

「誌面の上半分で『あッ』というせりふに一行だけつこてあとの空白で時間の経過を表現してみました」

「それも漫才の高等テクニクですか」

「タイポグラフィックな面白さをご堪能いただければ幸甚これに過ぎるものはありません」

「なんの挨拶ですもんそれ」

「あッ」

過ぎ去りし日々

「こんにちはッ。県民に〇〇〇〇〇〇〇〇を押しつける男ッ。三重県知事の鈴木えーけーでございますッ」

「またそれですか」

「ぼおくのばんつはぴいかぴかッ」

「歌まであるんですか」

「カムバックは派手に飾りたいなど」

「別にカムバックの必要はないと思いますけど」

「けどまあこうやって漫才を再開したわけでした」

「三年ぶりゆうことになりますね」

「じつはこの三年のあいだにはほかの雑誌にも漫才の高座を設けていただきました」

「伊賀地域で発行されてる短歌の雑誌でしたね」

「二〇一一年の九月に出た『風人』第九号です」

「しかしあんなことよかつたんですか」

「なにか悪いとこありましたか」

「会員のみなさんのまじめな短歌とか評論とかが並んでる誌面で漫才やるのはまずいことないですか」

「短歌の話もしましたがな」

「けどどう考えても不謹慎ですから」

「やゝりゝはさびてゝもゝこゝのなはさびぬゝゆうて三波春夫先生の『俵星玄蕃』も熱唱いたしましたし」

「よけい不謹慎ですがな」

「けどあれも楽しい思い出です」

「楽しかったんは君だけでしようね」

「ほかにもこの三年ほどのあいだには個人的にも社会的にもいろいろなことがありました」

「楽しい思い出ばっかりやありませんね」

「とくに思い出そうとしても忘れられないのは」

「鳳啓助師匠のギャグばくつたらあきませんがな」

「なんちゆうてもおととの東日本大震災ですな」

「東京電力の福島第一原発で事故もありましたし」

「あの原発事故では日本という国が抱えているさまざまな問題が浮き彫りにされました」

「政府の無策無能とか隠蔽体質とか」

「政官産学が癒着した原子力村の存在とかですな」

「もう問題だらけです」

「これは単に被災地とか福島県とかに限定された問題ではないですからね」

「日本全体の問題といえますか原発事故は地球規模の問題といえますか」

「こんにちはッ。県民に〇〇〇〇〇〇〇〇を押しつける男ッ。三重県知事の鈴木えーけーでございますッ」

「なんで知事さんが出てきますねん」

「あの東日本大震災では温かい支援の手が全国から被災地に差し伸べられました」

「海外からもいろいろ支援していただきました」

「三重県も県内各自治体も大震災直後からさまざまな支援を重ねてきました」

「名張市は宮城県の塩竈市に職員を派遣しましたし」

「そうこうしてるあいだに君えらいことで」

「どないしました」

「こんにちはッ。県民に〇〇〇〇〇〇を押しつける男ッ」

「またそれかいな」

「震災がれきの広域処理ゆう問題が出てきました」

「地震と津波で発生した大量のがれきを地元だけでは処理できないゆう問題ですな」

「しかしがれき処理なくして復興はありません」

「地元で処理するのが無理やったら広域でやりましょゆうゆうことになったわけですな」

「それで三重県も手をあげました」

「なんとか被災地復興の力になりたいと」

「ただしいくら三重県がその気になっても実際に処理するのは県内各自治体の処理場ですから」

「ほなどうしたらええんですか」

「三重県が県内各自治体にお願ひするわけです」

「震災がれきを処理していただけませんかと」

「去年の四月にそうゆう話が出てきましたして三重県の市長会と町村会が協議検討をいたしました」

「震災がれきを受け入れて処理するかどうか」

「もうそのへんから話は怪しかったわけですけどね」

「どのへんが怪しいんですか」

「受け入れの件を話し合う市長会の会合が非公開でしたから」

「なんで非公開にせなあきませんねん」

「それはわかりませんが非公開にしたせいでかえって問はず語りにわかつてくることもあるんです」

「なにがわかりました」

「みなさんこんにちはッ。手前ども市長会の〇〇〇〇〇〇一同は陰でこそそこそこそと悪たくみをしゃーしていただいておりますッ。よろしくどうぞおッ」

「よろしくどうぞおやないがな。市長会が悪たくみしてどないしますねん」

「でもしよせん〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ですからね」

「なんですなねん」

「結論もよう出さんと〇投げですわ」

「そこは〇投げやのうて丸投げでよろしがな」

「まあ丸投げやろが砲丸投げやろが好きなことしても
ろたらええんですけど」

「いったいどこに丸投げしたんですか」

「市長会の会長さんに一任ゆうことになりました」

「わざわざ会合を開いたのになですか」

「たしかに会合の場で出席者が協議検討して最終的な
結論を出すゆうのがふつうですけど」

「そのふつうのことができなかったわけですか」

「そこが悪だくみのつらいとこでして」

「悪だくみと決めつけたらあきませんがな」

「それで市長会の結論としては震災がれきを受け入れ
ましようということになりました」

「県の意向にさからうのは難しいかもしれませぬね」

「そのあと間髪を入れずに三重県から知事さんをはじ
めとした関係者が現地を訪れましてね」

「現地ゆうのはどこでした」

「宮城県と岩手県」

「そのふたつの県のがれきを三重県で処理しますと」

「去年の四月中にそうゆう確認書も交わされました」

「順調に進んだわけですね」

「でも最初からいろいろな懸念はありましたからね」

「懸念といえますと」

「最大の懸念は震災がれきが安全かどうかでした」

「原発事故による放射能汚染の問題ですか」

「確たるものがどこにもない問題ですからね」

「いろいろ念入りにチェックして安全ながれきだけを
広域処理するゆうことでしたけど」

「けど君そもそも原発かて3・11までは絶対安全で事
故なんか起きないゆうことやったんですから」

「それが安全やなかったわけですからね」

「たとえば野田さんね」

「当時の首相やった野田佳彦さんですか」

「こんにちはッ。自由民主党がじわじわじわじわ長い
時間をかけてぼろぼろにしてきた日本という国に一気
にとどめを刺す男ッ。民主党の上島竜兵ですッ」

「dachou俱樂部は関係ありませんがな」

「くるりんば」

「ギャグをばくるな」

「でも当時の野田首相が震災がれきの安全性を保証し
ても信用する人はごく少なかった思いますよ」

「そうかもしれませぬけどそんなことゆうてたら震災
がれきを受け入れるとこなんかありませんがな」

「せやから悪だくみが必要だったんですね」

「決めつけたらあかんゆうのに」

独自の考えありやなしや

「こんにちはッ」

「それはええねん」

「ぼおくのばんつは」

「それもええゆうととるやろ」

「それで去年の七月のことなんですけど」

「なにか動きがありましたか」

「住民説明会ゆうのが開かれました」

「震災がれきについて説明するわけですか」

「かりにがれきを受け入れるとなったら伊賀南部環境衛生組合の処理場で焼却処理するわけですけど」

「処理場といいますと」

「伊賀市奥鹿野の伊賀南部クリーンセンターです」

「奥鹿野ゆうたら市町村合併で伊賀市が誕生する以前には青山町に属していた地区ですな」

「つまり旧青山町の住民代表を対象に伊賀南部環境衛生組合が説明会を開いたわけです」

「どうでした」

「新聞報道によりますと反対意見が相次ぎました」

「震災がれきは受け入れないゆうことですか」

「住民代表側は一致団結してノーでしたな」

「やっぱり放射能関係がネックですか」

「伊賀地域にはいろいろと特産品がありました」

「伊賀米とか伊賀酒とか伊賀牛とか」

「あほとかまぬけとかすかたんとか」

「そんな特産品がどこにありますねん」

「けどこの伊賀地域ぐらいあほやまぬけやすかたんを大量に輩出してる土地も珍しいのどちがいますか」

「そんなもん大量に輩出せんでよろしがな」

「震災がれきを焼却処理したら伊賀の特産品が売れなくなるのではないかといい心配が出てきました」

「風評被害が出るかもしれないゆうことですか」

「かりに生産物にいつさい影響が出ないとしても」

「消費者心理に影響が出る可能性はありますからな」

「伊賀のブランド力が低下するかもしれません」

「それはなんとでも避けなあきません」

「しかも協定書が存在してたんです」

「どうゆうことですな」

「奥鹿野の処理場には名張市と旧青山町で発生したごみ以外は搬入しないという協定が伊賀南部環境衛生組合と地元とのあいだで結ばれていたんです」

「それやったら震災がれきは搬入できませんがな」

「せやから悪だくみが必要だったんですな」

「君さつきからそればかりやないか」

「そうこうしてるうちに悪だくみの陰にあった驚くべき事実が判明してきました」

「悪だくみ悪だくみゆうて連呼してたらしまいに誰かから怒られてしまうのぢがいますか」

「〇〇〇〇の陰にあった驚くべき事実が」

「あとから伏せ字にしても手遅れやがな」

「とにかくとんでもないことがわかってきました」

「いったいなにがわかったんですか」

「じつは誰もなんにも考えてなかったんです」

「どうゆうことですねん」

「つまり三重県は震災がれきを受け入れて被災地の復興を支援したいという考えを表明したんですね」

「それで県内各自治体に処理を依頼したわけです」

「そうなるも今度は県内各自治体が考える番です」

「県内各自治体がそれぞれに考えたんですから誰もなんにも考えてないゆうことはありませんがな」

「たしかに考えました」

「それやったらよろしいがな」

「たとえば伊勢市は最初からノーと明言してました」

「ちゃんと考えた結果やったらそれでよろしいがな」

「松阪市も考えてましたね」

「考えるのはあたりまえのことですから」

「最初は受け入れることにしてたんですけれど」
「途中で変わったんですか」

「がれきの量なんかの面で状況が変化してきてもう広域処理する必要はなくなつたんやないかゆうことで」

「そしたら松阪市も震災がれきは受け入れないと」

「そうゆう結論に至りました」

「つまり伊勢市も松阪市もちゃんと考えて結論を出すというごくあたりまえのことをしてるわけです」

「ところが世の中にはあたりまえのことをあたりまえにできないところがあるんです」

「そんなとどこにありますねん」

「この伊賀地域がそうなんです」

「そんなことないと思いますけど」

「でも伊賀市や名張市にはまともにものを考えられる人間なんてひとりもないのぢがいますか」

「君またそうゆうことをゆうてるけど」

「たまに深刻な顔してなんぞ考えごとでもしてるのか
思たら単にうんこ我慢してるだけやったりしてね」

「そんなことどうでもよろしいがな」

「うんこ終わってもまだ深刻そうな顔してるな思たら
単に紙がなかっただけやったりしてね」

「しつこいな君はほんまに」

「あまりにもなにも考えないというので去年六月には伊賀市議会でも問題になりましたね」

「そんなことあったんですか」

「ある議員先生が一般質問で厳しく質問なさったと昨年七月七日付の伊和新聞で報じられてました」

「どんな質問でした」

「市独自の考えはあるのか」

「どうゆうことですねん」

「要するにまあ国や県のゆうことそのまま鵜呑みにしてるんやなしに伊賀市独自の考えにもとづいて市民の安全を守らなはいすんねんゆうことですね」

「独自の考えはなかったんですか」

「伊賀市も名張市もなにも考えることなくただ三重県に唯々諾々と従ってるだけみたいな印象でした」

「ちゃんと考えなあきませんか」

「でもほんとに誰もなんにも考えてなかったんです」

「地域住民の立場に立ってしっかり考えるゆうのはあたりまえのことやと思いますけど」

「そのあたりまえのことをしようとして勝手に陰でこそこそ悪だくみに走るのが伊賀の土地柄なんです」

「けどいくら悪だくみしてみても去年の七月には住民説明会で住民代表がノーを表明したわけですから」

「協定書の存在も明らかになりましたしね」

「つまり受け入れないという結論が出てしもたわけですから悪だくみもくそもありませんがな」

「でもそれで終わりにならないのが伊賀なんです」

「まだなにかあったんですか」

「悪だくみのあとに悪あがきが始まったんです」

「そんなんばっかりですがな」

「伊賀南部環境衛生組合は半月ほどのインターバルにおいて二回目の住民説明会を開催いたしました」

「どないになりました」

「もちろん反対意見続出でぼろぼろでした」

「そうなたら伊賀南部環境衛生組合も震災がれきは受け入れないという結論を出さなしかたないですね」

「ところが十月にまた住民説明会がありましたね」

「なんですんねんいったい」

「地域住民の意向を無視して強引に受け入れを進めようとする連中にととうとう神様もお怒りになりました」

「なんちゆうてお怒りになったんですか」

「おまえらしまいにしばき倒すぞおッ」

「そんな品のない神様はいませんやろ」

「でも神風が吹いて説明会が中止になったんです」

「無茶苦茶なことゆうたらあきませんがな」

悪たくみ悪あがき

「こんにちはッ。県民に〇〇〇〇〇〇を押しつける男ッ。三重県知事の鈴木えーけーでございますッ」

「それはもうよろしがな」

「けど神風が吹いたのは事実なんです」

「どうゆうことですねん」

「去年十月の頭にまたしても住民説明会が開かれるはずやったんですけど君えらいことになりました」

「なにがあつたんですか」

「台風十九号が襲来いたしました」

「そういえばたしか十月早々に台風が来ましたね」

「雨は降るわ風は吹くわ住民説明会は中止になるわ」

「それが神風ですか」

「悪たくみ軍団は蒙古軍のように蹴散らされました」

「悪たくみ軍団とかゆうてたらあきませんがな」

「しかし悪あがきはいつこうに収まりません」

「まだつづくんですか」

「次の日の朝の新聞にきれいなカラー印刷のちらしが折り込まれてましてね」

「なにが書いてありました」

「三重県と伊賀南部環境衛生組合がこそこそこそこそ進めている悪たくみにご協力をよろしくどうぞおッ」

「よろしくどうぞおやないがなほんまに」

「でも三重県環境生活部廃棄物対策局とかゆうあたりが企画発行したちらしが折り込みで入ってまして」

「要するに三重県で震災がれき受け入れて被災地の復興を支援しようと呼びかけるちらしですか」

「住民説明会の次の日にちらし入れたら効果的なんやないかと浅知恵をしぼったあげくの悪あがきです」

「それやったら説明会の中止は残念なことでしたな」

「でも住民説明会は日をあらためて開かれました」

「またおんなじことのくり返しですか」

「伊賀南部環境衛生組合が浅知恵をしぼって震災がれきの試験焼却をさせてくださいと頼み込みました」

「協定書がある以上は試験焼却も無理ですがな」

「せやから地元住民からは相手にされませんでした」

「そろそろでしようね」

「一度ならず二度三度としつこい点も嫌われて住民側からはもう説明に来るなという声まで出ましてね」

「そらまあ仏の顔も三度ゆうくらいですから」

「ですから仏様もすっかりお怒りになりました」

「なんちゆうてお怒りになったんですか」

「おまえらしいにしばき倒すぞおッ」

「それさっきの神様とおんなじですよん」

「神仏混淆と申しますか本地垂迹と申しますか」

「なにわけのわからんことゆうてますねん」

「とにかくほかにもあれこれ悪あがきがありまして」

「けど地元住民の同意がないと話が進みませんが」

「ですから三重県と伊賀南部環境衛生組合が震災がれきを受け入れて処理するためには旧青山町一帯を徹底的に焼き滅ぼしてしまいうかかないんやないかと」

「君そんな織田信長の伊賀攻めみたいなことしてどないしますねん。だいたい旧青山町を焼き滅ぼしたら奥鹿野の処理場まで燃えてしまってますがな」

「連中にはそんなことすらわかってなかったんです」

「そんなあほな」

「でもほんとに伊賀市とか名張市とかの人間はものを考えるということをしないんです」

「独自の考えがないゆうことですか」

「震災がれきの問題でもただ三重県のゆうことをへこへこへこ聞いてるだけで自分たちのおつむで考えるゆうことをまったくしませんでしたからね」

「まったくゆうこともないでしょうけど」

「三重県は去年の四月に市長会だけやのうて町村会からも震災がれき問題で協力をとりつけたんですけど」

「県内の町村でも処理してもらいうことですか」

「それを受けて松阪市の南にある多気町では去年の七月に住民説明会が開始されました」

「伊賀と同じころに始まったわけですね」

「多気町には町民以外の人からもいろいろ意見が寄せられてすったもんだがあつたんですけど」

「どないになりました」

「去年十一月に町議会の全員協議会で話し合ったところ反対意見が圧倒的に多かつたそうです」

「受け入れは圧倒的にノーゆうことですか」

「そういつた町議会の意向も踏まえて多気町の町長さんは震災がれき受け入れの断念を表明なさいました」

「そらそうせなしやあないでしょうね」

「ところが伊賀地域はそうではなかったんです」

「なにがあつたんですか」

「地元同意は無理ゆうことがはつきりしたんですから震災がれきは受け入れないという結論を出して県に伝えるべきやつたんですけどそうはしませんでした」

「ほないつたいなにしてたんですか」

「おそらく○○○○○○○○してましたんやろね」

「伏せ字ではなにもわかりませんがな」

「まるで○みたいに○を○○○○○○○○○○とか」

「さっぱりわからんゆうとるやろ」

「これはもう土地柄みたいなものかもしれませんね」
「なんの話ですもん」

「伊賀市とか名張市とかの人間がとにかくものを考えようと思わない件ですけれど」

「なにも考えないゆうよな土地柄があるんですか」

「あともうひとつ人の意見にいつさい耳を傾けないという顕著な傾向もありますけど」

「それも土地柄ですか」

「伊賀市でもたとえば新しい市庁舎の建設問題では市民の意見がいつさい無視されてたとかですな」

「あの問題では『伊賀百筆』にも伊賀市民の怒りの声とかいろいろ掲載されましたけど」

「おまえらしまいにしびき倒すぞおッ」

「それは神様と仏様の怒りの声ですがな」

「神様でも仏様でも誰でもええからこらのあほいっぺんええだけしびき倒したつてもらいたいもんです」

「知らんがな」

「でもほんとに自分で考えようとせず人の意見を聞くともしないのが伊賀の土地柄なんです」

「そんな土地柄でがれき問題はどうなつたんですか」
「完全な手づまりで膠着状態になつてしまいました」
「膠着してる場合やありませんがな」

「相手のある話ですから三重県が受け入れるのか受け入れないのか一日も早く結論を出すべきなんです」

「そのためには伊賀南部環境衛生組合が一日も早く多気町のように断念を表明せなあきませんがな」

「ところができないんです」

「なんでですもん」

「やつぱりずんべらぼんの○○やからでしようね」

「ずんべらぼんの○○ではわかりませんがな」

「とにかく被災地のこととか地域住民のこととか考えなあかんことが目の前にいろいろあるゆうのに」

「なにも考えようと思いませんがな」

「○○○○○○○○○○して○みたいにな○を○○○○○○○○○○

「いきなり『わいッ』といわれましても」

「こんにちはッ。県民に○○○○○○を押しつける男ッ。三重県知事の鈴木えーけーでございますッ」

「もしかしたら君」

「なんですもん」

「伏せ字になつてる文字は震災がれきが正解ですか」

「震災がれきは五文字ですけどこの伏せ字は六文字で正解はもつとおぞましいものとなつております」

「おぞましいものでは困りますがな」

「とにかく困ったもんでございまして」

「けど三重県のほうも困ってしまおうでしょうね」

「たしかに困ってしまう結果にはなりましたけど三重県もええとこに目はつけてたんですよ」

「いったいどこに目をつけてたんですか」

「伊賀地域に決まっておりますがな」

「なんで伊賀地域がええとこなんですか」

「なにしろ自分の頭で考える習慣がない土地ですからなにゆうたかてはいはいゆうこと聞くやろと」

「そんなこともないでしょうけど」

「けど実際なんにも考えませんでしたから」

「たしかに伊勢市や松阪市とはちがいました」

「とにかく自分の考えというものがありませんから県からいわれたとおり動くわけなんですわ」

「それは三重県としては楽でしょうね」

「くみしやすいいいいますか手なづけやすいいいいますか手玉に取りやすいいいいますか」

「絶対服従なわけですか」

「けど三重県にもえらい計算ちがいがありましたね」

「どこで計算がちごたんですか」

「なんにも考えませんからはいはい調子のええことゆうてるだけで結局くその役にも立たんわけです」

「くその役ゆうたらあきませんかな」

「しかもこれ三重県にとって役立たずというだけな地域住民にとつても役立たずなわけなんです」

「地域住民の考えを受け入れませんか」

「地域住民サイドは地域の総意といつてもいいほど決定的な意見を明らかにしてゐるわけです」

「それを完全に無視されたらたまりませぬね」

「震災がれきは受け入れませんと明言してるのにご理解くださいご理解くださいの一点張りですから」

「地域住民はなにか理解できたんですか」

「こいつら底抜けの○○やなゆうことは心ゆくまで理解できたでしょうね」

「その伏せ字はほぼ想像がつかますけど」

「おまえらしまいにしばき倒すぞおッ」

「今度は誰の怒りの声ですわね」

「あまりにも役立たずやからゆうて三重県が伊賀地域にこんなふうにも怒っても不思議ではないんです」

「たしかに膠着状態が長引いてますから」

「いつまでもぐずぐずしとつたらしまいに一木一草も残すことなく伊賀全土を焼き尽くしてしまおうぞおッ」

「せやから織田信長の伊賀攻めやないとゆうてますがな」

三億円の黒歴史

「こんにちはッ。県民に〇〇〇〇〇〇を押しつける男ッ。三重県知事の鈴木えーけーでございますッ」

「それまだやるんですか」

「でもこれで知事さんも伊賀はつかえんとこやなゆうことがよくおわかりになったでしょうね」

「つかえるとかつかえないとかさゆう問題でもないと思いますけど」

「伊賀だけはほんまにくその役にも立たんなど」

「くそとかゆうたらあきませんがな」

「とにかく知事さんをはじめとした政治家のみなさんはなんやかんやと大変なんです」

「それは当然でしょうね」

「なかでもいちばん大変なのが選挙ゆうやつでして」

「政治家は有権者の審判を受けなあきませんから」

「なかには受けてない人もいますけどね」

「そんな人いませんやろ」

「げんに三重県議会の名張市選挙区がそうですか」

「さうゆうたら二期つづけて無投票でしたか」

「つまり名張市選出の県議会議員の先生おふたりは二〇〇三年の県議選以降ただの一票も有権者の投票による信任を獲得していらっしやらないんです」

「たしかに選挙の洗礼は受けてはりませんわね」

「なんやばったもんみたいな話やないですか」

「ばったもんゆういいかたはないやろがな」

「でも一般的には政治家ゆうのは選挙に勝ってなんぼのみなさんなんです」

「選挙に通らないと話になりません」

「政治家も選挙に落ちたらただの人ゆうくらいで」

「当選したら先生ですけど落選したらただの人やと」

「でもただの人やつたらまだええほうなんです」

「ただの人やない人がいるんですか」

「選挙に落ちたらただの〇〇ゆうのがいてますから」

「伏せ字ではわかりませんがな」

「けど君やつぱり伊賀ゆうのはたいしたところでして」

「どこがですか」

「選挙に通って先生と呼ばれてる政治家であるにもか

かわらずただの〇〇ゆうのがごろごろしてますから」

「なにがごろごろしてるんですかいったい」

「あの手の〇〇たれなんとかならんもんですか」

「〇〇たれてなんやねん〇〇たれて」

「ほんまにあの〇〇たれどもだけはいっぺん叱り飛ばしたらなんなんらんとお思いますせんか君」

「〇〇たれどもてなんやねん〇〇たれどもて」

「それで政治家のみなさんが選挙に勝つためにはいろいろと手柄が必要になってきます」

「手柄といいますと」

「私は首長としてこんなことをなしとげましたとか私は議員としてこんなことを実現させましたとか」

「そうゆう手柄が選挙の票に結びつくわけですか」

「三重県における今回の震災がれき騒動にそういった側面があったことは否めません」

「どうゆう側面ですもん」

「そらやつぱり知事さんのがれきを受け入れて復興を支援することが手柄になると考えてあそこまで目の色を変えて前のめりになってはったわけですから」

「けど残念な結果に終わってしまいました」

「ですから今年四月のことですけど」

「どうしました」

「知事さんが定例記者会見で就任以来の二年間を振り返っていらっしやいますね」

「二年といえますと早いもので初当選から任期一期末の半分が過ぎたゆうことになります」

「残念だったことの筆頭に震災がれきの県内受け入れが実現できなかったことをあげておいででした」

「手柄が立てられずにとても残念やったと」

「どうしても立てたいんやったら代わりに〇〇〇でも立てといたらどうなんですかね」

「いったいなにを立てとけゆうんですか」

「でもこれで三重県と伊賀地域の相性はよくないという事実がいよいよはつきりしてきました」

「相性がよくないといいますと」

「だいたいあの二〇〇四年に実施された『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』ね」

「ようやくその話題ですか」

「三重県と伊賀地域旧七市町村が血税三億円をきれいにどぶに捨ててしまった悪夢のような事業ですけど」

「たしかにいろいろありました」

「三重県もあの事業が無茶苦茶になった時点で伊賀とはつるまんぼうがええなと気づくべきやったんです」

「でも当時の知事さんは野呂昭彦さんでしたから」

「つまりいまの知事さんは伊賀の土地柄をまだよくご存じなかったゆうことでしょうね」

「もともと兵庫縣のご出身でいらっしやいますし」

「伊賀はほんまに役立たずな土地柄なんですから」

「そうゆうことをゆうたらあかんゆうのに」

「なんせただの〇〇が平気で〇〇〇やってますから」

「せやから伏せ字ではわからんゆうてますがな」

「とにかくあの伊賀の蔵びらきゆうあほみたいな事業はいまや完全に三重県の黒歴史になってまして」

「黒歴史でなんですわねん」

「なかつたことにしたい過去のできごとのことです」

「もうなかつたことになってるみたいですよけど」

「てゆうかあんなん最初からなかつたことにされてたとゆうても過言ではないんです」

「なかつたゆうたかてちゃんとありましたかな」

「けど三重県庁内部では事業が開幕する以前の段階でこの事業は失敗よとささやかれてたくらいですから」

「そんなことささやかれてたんですか」

「ちまちましたご町内イベントを寄せ集めることしかできない○○が伊賀の魅力を全国発信とかひとりよがりな舞いあがってただけですからろくなことはできませんでしたし、しかも相手にもされませんでした」

「それやったらなかつたも同然かもしれませぬ」

「文芸評論家の川西政明さんが手がけていらつしやつた『新・日本文壇史』全十巻が今年の三月についてに完結いたしました」

「なんでいきなり本の話ですわねん」

「去年の十月には第九巻の『大衆文壇の巨匠たち』ゆう本が岩波書店から出たんです」

「岩波書店ゆうたらあの岩波文庫の岩波書店ですか」

「両手の人差し指を口につつこんで唇を思いきり左右にひっぱりながら岩波文庫とゆうてみてもどうしてもいわなみうんことしかいえないあの岩波文庫の岩波書店です」

「そんなことはどうでもええんです」

「第九巻の第五十九章には江戸川乱歩や松本清張なんかのことが書かれてまして」

「探偵小説の巨匠がとりあげられてるわけですか」

「乱歩のことを論じるにあたって川西さんが大々的に引用していらつしやる本があります」

「どんな本ですか」

「三重県の黒歴史となった伊賀の蔵びらき事業でどぶに捨てられた血税三億円からわずか五百五十万円だけかすめとつて出版した『子不語の夢』という江戸川乱歩と小酒井不木の往復書簡集なんですけど」

「それは君ちよつとすごい話とちがうんですか」

「すごいやんか伊賀ッ。すごいやんか三重ッ。すごいやんかえーけーッ」

「なんですわねんそれ」

「すつごーいッ。えーけーすつごーいッ」

「君なんぞ悪いものでも食べたんですか」

責任者は誰だ

「おらおらおらおらおらおらおらあッ」

「それ久しぶりで耳にしますけど」

「せやからこいつに盃やつてうちの会はなんの得になるんじゃこらおおッ」

「なんですねんいつたい」

「てめなにゆうてんのかわかつてんのかいッ」

「僕には君のゆうてるのがもうひとつよくわからな
いんですけど」

「花菱と山王会喧嘩させる気かいッ」

「どうやら映画の話らしいなと察しはつきますけど」

「なーんもする前から花菱のうしろにこそそ隠れよ
うとしくさりやがつてこらあッ」

「そろそろそのへんまでにしといたらどないですか」

「北野武監督作品『アウトレイジビヨンド』から塩見
三省さんのおらおらシーンをお送りいたしました」

「塩見さんのせりふやつたんですか」

「塩見さん京都府のご出身ですからあの風貌で関西弁
の啖呵切つたら正味ほんまもんなんです」

「えらい迫力でしようね」

「しょんべんばちびりますたい」

「横山やすし師匠のギャグばくつたらあかんがな」

「要するにこの塩見さんのせりふみたいになんの得に
なるんじゃこらゆう話になつてしまふわけなんです」

「なんのことですねん」

「伊賀の蔵びらきとかゆうて血税三億円どぶにほかし
て伊賀地域になんの得になつたんじゃこらと」

「ほかしてしもたら得どころか損するだけですかな」

「けどたつたひとつ伊賀地域の得になつていろんなど
こでいまも役に立つてる事業があるんです」

「どんな事業ですな」

「ですからあの『子不語の夢』という本だけがちゃん
と世の中の役に立つてるわけですてね」

「それ以外は全滅やつたんですか」

「そんなもん伊賀の蔵びらき事業ゆうのは君ほんまに
官の〇〇と民の〇〇とが手を携えてやで」

「君さつきは伏せ字なしでゆうてましたかな」

「官のあほと民のあほとが手を携えてやで」

「いいなおす必要もないと思いますけど」

「なーんも考えんとあほがこらしようもないご町内イ
ベントに血税三億円ほかしくさりやがつてこらあッ」

「塩見三省さんやないんですから」

「責任者出てこおいッ」

「そのせりふもえらい久しぶりに聞きますけど」

「こんにちはッ。県民に〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を押しつける男ッ。三重県知事の鈴木えーけーでございますッ」

「ですから伊賀の蔵びらき事業当時の知事さんは鈴木さんやのうて野呂さんやったゆうてますがな」

「たしかにあれば二〇〇四年度事業でしたから事業の最高責任者は野呂さんなんですか」

「それがどうかしたんですか」

「事業の大枠が決まったのはその前の時代でした」

「ということは北川正恭さんの時代ですか」

「北川知事の時代に三重県がエリアを限定して予算をばらまくゆうあほな施策が進められました」

「そうゆうたら歴史街道フェスタとか東紀州フェスタとかありましたね」

「そのあとが伊賀地域にばらまく番やっただんですけど北川さんちよつと困らりましたね」

「なんぞ都合悪いことがありましたか」

「ばらまきの口実といますか名目といますか」

「やっぱりそうゆうのも必要でしょうね」

「困った困ったゆうてたら誰かが二〇〇四年は松尾芭蕉の生誕三百六十年やゆうことを発見したんです」

「それで『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』になったわけですか」

「北川さんは生誕三百六十年の三百六十は全方位の三百六十度じゃないかと大変お喜びになりました」

「なんやもうひとつ意味不明な喜びかたですか」

「ですから野呂さんは北川さんの敷いたレールを走ってただけの巻き込まれ型責任者やっただんです」

「巻き込まれ型とかそんなあるんですか」

「つまりあの三億円の黒歴史に関しては野呂さんよりも北川さんのほうが罪が重いわけでした」

「そんな犯罪者みたいなこといいますけど北川さんは改革派知事として全国に名を馳せたかたですから」

「たしかにシャープ亀山工場の誘致なんか首長によるトップセールスとしておおいに話題になりました」

「三重県の知事が全国から注目されましたからね」

「三重県知事は目のつけどころがシャープだねとか当時はものすごく評判になりましたけど」

「いまやシャープの経営がえらいことになってますからろくなことはいわれてないでしょうね」

「なんちゆうフラットなところに目エつけとったんじゃあのがきほとか」

「あのがきゆうたらあきませんかな」

「このままやったらしまいにフェルマータやでとか」
「どうゆう意味ですもんそれ」

「ほんまに手柄立てるゆうのも難しいことして」

「最初は手柄やったもんがいつのまにか負の遺産になつてたりしますからね」

「北川さんも環境先進県とかぶちあげてごみ固形燃料の発電所つくつたりしはりましたけど」

「例のRDFゆうやつですか」

「そのRDFの貯蔵槽が爆発して桑名の消防士さんがふたりも殉職なさいました」

「起きてはならないことが起きてしまいました」

「爆発事故が起きたのは北川さんが知事を辞めはったあとでしたけど実質的な責任者は北川さんですから」

「あのシステムを導入した張本人ですからね」

「つまり消防士さんを死に追いやった張本人でして」

「そうゆうことをゆうなどゆうてますがな」

「ヒットヒット。ひとつとごろしッ」

「ちよつと君いくら漫才でも人のこと名指しで人殺しゆうたらあきませんがな」

「いやこれは横山エンタツ花菱アチャコ師匠の名作漫才『早慶戦』に出てくる有名なギャグですがな」

「早慶戦ゆうことは野球のヒットの話なんですか」

「ヒットヒット。北川さんはひとつとごろしッ」

「やっぱり人のこと人殺しとゆうてるやないか」

「伏せ字にすべきかどうか思案のしどころでしょう」

「ひとつとみたいにゆうててどないしますねん」

「でも北川さん野呂さんと二代にわたる黒歴史も『子不語の夢』が探偵小説研究の基本資料としてお役に立つてることであらうじて救われてるんです」

「伊賀の蔵びらき事業の唯一の手柄ゆうわけですか」

「今年の二月には三上延さんの大人気シリーズ『ピリア古書堂の事件手帖』の第四巻『菓子さんと二つの顔』がメディアワークス文庫になりましたね」

「それたしかテレビでやってましたね」

「一月から三月までフジテレビ系列でこのシリーズを原作にした連続ドラマが放映されました」

「主演はいまや超売れっ子の剛力彩芽ちゃんです」

「彩芽ちゃんは篠川菓子という女の子を演じたんですけどシリーズの愛読者からは菓子さんはロングヘアーだとか菓子さんはもつと巨乳だとか批判も出まして」

「巨乳とかそういう話はいいですから」

「あの第四巻でも参考文献として『子不語の夢』をあけていただいてありますありがたく思っただんですけどロングヘアーで巨乳がええんやつたら中国でも大人気の蒼井そらちゃんあたりでどうなんでしょうね」

「それいったい誰ですもんね」

いかにして成功に導くか

「ものごとが目もあてられないような大失敗に終わってしまいううのはままあることではね」

「てゆうかすんなり大成功することのほうがむしろ珍しいのどちらがいますか」

「もしも大失敗に終わってしまった場合いつたいなにをすればいいのかわからないのか」

「終わってしまつた場合いつたいなにをすればいいのかわからないのか」

「できることがひとつだけあるんです」

「なにしますねん」

「大失敗の原因を分析してその反省を将来に活かすことです」

「なるほどそれは大切なことでしょうね」

「ですから血税三億円をどぶに捨てて目もあてられない大失敗に終わった伊賀の蔵びらき事業もです」

「大失敗の原因をきっちり分析するべきであると」

「いやいや原因はもうはつきりしてますから」

「そうなんですか」

「二〇一〇年の漫才でも指摘したことですけど」

「なにが原因でした」

「関係者全員があほやったことです」

「君そんなことばっかりゆうてますけどね」

「でもこれは紛れもない事実ですから」

「そしたらその反省を将来に活かすためにはどうしたらええんですか」

「あんな事業二度とせえへんかったらええんです」

「身もふたもない話ですけど」

「官民双方の関係者全員があんなあほなことには二度と税金をつかいませんと肝に銘じて世間の片隅でひっそりつましく生きてくれたらええんです」

「なにか問題があるんですか」

「関係者全員あほですからなにがあほなことでもなにがあほなことでもないのかわからないんです」

「それやったら将来に活かすことができせんがな」

「伊賀に将来なんかないのどちらがいますか」

「そこまで決めつけたらあきません」

「そしたら成功例から学んでもらいますよか」

「成功例といひますと」

「伊賀の蔵びらきの数ある事業のなかで唯一成功した『子不語の夢』の出版事業に決まっています」

「またその話ですか」

「芭蕉さんは行かずにたくさんのおぼさんが行った伊賀の蔵びらきで私はいかにして事業を成功させたか」

「君ほんまにそんなばっかりですか」

「まず重要なポイントがあります」

「事業を成功に導くポイントですね」

「必要とされている事業をやるゆうことが重要です」

「それはごくあたりまえのことや思いますけど」

「けど君あの伊賀の蔵びらきの数多い事業のなかで必要とされていたものがなんぞありましたか」

「いろいろあったんとちがいますか」

「しよせん学芸会の域を出るものやなかったですね」

「なんで学芸会ですもん」

「学芸会は出演する子供の身内とか関係者からは必要とされてても世間一般の人には関係ありませんから」

「ほな伊賀の蔵びらきも世間一般の人にはいっさい無関係で必要とされてなかったゆうことですか」

「右も左もわからん田舎もんが身内だけで盛りあがって喜んでるご町内イベントばかりでした」

「そうゆういいかたはひどいと思いますけど」

「あんなもん税金三億円がばらまかれると聞きつけてから大あわてで自分たちの趣味や道楽の延長上に一円でも多くの税金を囲い込もうと目の色を変えたあさましくて欲の深い乞食連中が泥縄式にでっちあげたすつとこどつこい事業を野放しにただけでしたかな」

「ようそこまで悪口すらすらと出てきますな」

「その点『子不語の夢』の企画は伊賀の蔵びらきの構想が発表される以前に始まってましたから」

「伊賀の蔵びらきは二〇〇四年度事業でしたけど」

『『子不語の夢』は二〇〇二年スタートでした』

「二〇〇二年になにがありましたん」

「千葉県の成田山書道美術館で小酒井不木あての江戸川乱歩の手紙が展示されました」

「そこから始まって江戸川乱歩と小酒井不木の書簡集にたどりついたわけですか」

「名張市立図書館が発行してもよかったですね」

「図書館は乱歩の目録とかも出してますからね」

「けど当時は乱歩の著書目録つくってる最中でしたし名張市はもうお金がありませんと宣言しましたし」

「そうゆうたら二〇〇二年はたしか名張市が財政非常事態宣言を出した年でしたか」

「書簡集を出すことで乱歩研究が大きく前進するのはわかってたんですけど先立つものがなかったんです」

「そこへ伊賀の蔵びらきの構想が出てきたと」

「渡りに船ゆう感じでございまして」

「ラッキーな話やったわけですね」

「あほなお金でもお金はお金ですから」

「あほなお金ゆうたらあきませんかな」

「どんなあほな事業の予算でもごちゃごちゃいわんと頂戴することが成功のために必要やったんです」

「君ええだけごちゃごちゃゆうてましたがな」

「伊賀の蔵びらきはほんまにあほな事業でしたけどこつちにそのあほさを受け入れるだけの度量があつたら『子不語の夢』の予算が獲得できたわけでした」

「度量ゆうより無節操なだけやと思いますけど」

「ですからもうあほさままでございましてね」

「あほさままで君」

「三重県と伊賀地域旧七市町村のあほのみなさんにはとても足向けて寝られませんか」

「好きなどこ向いて寝たらよろしがな」

「けどこれはやつぱりおかしなことなんです」

「いったいなんの話をしてるんですか」

「なんでそこら転がつてるあほさんにあほさままでかゆうて深甚なる謝意を捧げなあきませんねん」

「君が勝手に捧げてるだけですがな」

「できるだけ社会の邪魔にならんように世間の片隅で可能なかぎり環境に負荷をかけることなくひっそりつつましく気配を消して静かに謙虚に肩身を狭くしてこそそそ生きているのが本来あるべきあほの姿なんです」

「ほんまにようすらすらと並べられるもんですな」

「しかし付け焼き刃ゆうのはもろいもんですね」

「そらまたなんの話ですんねん」

「あれだけ固く誓って漫才を始めたにもかかわらず伏せ字のころつと忘れてしもてますから」

「そうゆうたら伏せ字きれいになくなりましたね」

「伏せ字なしでなんやもうあほのオンパレードです」

「あほさんとかあほさまとかあほのみなさんとか」

「芭蕉さんは行かずにたくさんのあほさんが行った伊賀の蔵びらきとかいったいなにごとなんですか」

「なにごとくそも君がゆうたことですがな」

「反省せなあきませんね」

「そのほうがいいと思います」

「伊賀地域特有の隠蔽体質に染まって付け焼き刃の伏せ字なんか使用したことを深く反省いたしまして」

「反省するのはそつちですか」

「これからは伏せ字なしで行きたいと思えます」

「そしたら教えてもらいたいですけど知事さんはいつたい県民になにを押しつけはつたゆうんですか」

「いやそんなおぞましいことはとても誌面では」

「隠蔽体質を深く反省したんとちがうんですか」

「そしたらくわしいことは僕のブログでどぞおッ」

「ブログでどぞおではなにもわからんがなほんまに」

土地柄的に無理

やあ。お元氣ですか。伊賀地域十八万人のすつとこどつこいのみなさん。いやいや。うそうそ。そんなことはないそんなことはない。

伊賀地域十八万人の善良なる市民のみなさん。ご愛読ありがとうございます。とはいえ、漫才も三十ペーヅつづくとさすがにだれてきます。書くほうもだれませんが、お読みになるほうも同様でしょう。そこで地の文に移行して目先を変えることにしました。

すでに記したことですが、この漫才は本誌編集部からご懇願をいただいて二〇一〇年、名張市の江戸川乱歩騒動を題材に書き始めたものです。ところがなかなかあほらしくなり、中絶するに至ってしまいました。しかしいつまでもほつとくわけにはまいりません。

本誌への義理を果たさにならん、という理由もむろんありますが、それ以外に、なんとも不透明で不可解な終幕を迎えたあの一連の騒動を一度つぶさに振り返っておくことは、名張市の将来にとって有益であり必要であると考えるからにはほかなりません。

そんな昔のこといちいちほじくり返してんじゃねーよばーか、とおっしゃる向きもおありかもしれませぬけど、ばかはそのつちだばーか。

これもまたすでにお読みいただいたところですが、ものごとが大失敗に終わった場合、原因を分析してその反省を将来に活かすことを考えるべきなのね。ところがそういうことをいっさいせんかつたもんやから、伊賀の蔵びらき事業の大失敗が名張市のまちなか再生事業にそのまま引き継がれ、まちなか再生事業の大失敗に連動して乱歩騒動も悲惨な幕切れを見ることになってしまったという寸法です。

かなり複雑ではあるんですけど、話の流れを整理してみるとこんな感じになります。

二〇〇四年 五月、伊賀の蔵びらき事業が開幕。六月、名張地区既成市街地再生計画策定委員会が発足。九月、中庭に乱歩生誕地碑が建つ榊田医院第二病棟の寄贈を所有者が名張市に申し出る。十一月、伊賀の蔵びらき事業が閉幕。同じく十一月、榊田医院第二病棟の寄贈手続きが完了。

二〇〇五年 一月、名張地区既成市街地再生計画策定委員会が名張まちなか再生プランの素案を名張市に提出。二月、名張市が名張まちなか再生プランの素案を公開し、パブリックコメントを募集。三月、名張まちなか再生プランが素案どおり決定される。それを受けて六月、名張まちなか再生委員会が発足。

ではつづきまして、伊賀の蔵びらき事業の重大敗が名張市のまちなか再生事業にそのまま引き継がれたことを示す証拠をあげておきたいと思います。

二〇〇四年十一月に伊賀の蔵びらき事業が終了し、翌〇五年三月に名張まちなか再生プランが正式決定、同年六月に名張まちなか再生委員会が発足した直後の七月、名張のまちでいったいながあったか。



こげなことがあつたのじゃ。あほじゃろ。野放図なまでのあほじゃろ。名張まちなか再生プランの目玉として整備されることになつていた細川邸という旧家の裏手に、こげなあほな看板を出して喜んでるやからがおつたのじゃよ。

なーんでスフィックスなんじゃろうなあ。なーんでピラミッドなんじゃろうなあ。なーんでその横に怪人二十面相もどきが立つとるんじゃろうなあ。さっぱりわーけわかんね。

わけはわかんないものの、これがなんだつたのかはわかります。名張市が進める市民公益活動実践事業のひとつとして、写したくなる町名張をつくる会、とかいう市民団体が掲げてくれちゃつた看板です。

つまり、そこの市民団体とやらがですね、こーゆー事業をしたらいいと思いまーす、と提案して、名張市が、よろしなよろしなそらよろしな、と賛同し、事業費の全額だか半額だかは知りませんが、こげなあほなことには微々たる額とはいえ市民の血税をぶち込んでくれちゃつたりなんかしちゃつたわけです。

それでまあ笑われた笑われた。私のウェブサイトにこの写真をドーンと掲載しましたところ、ご閲覧諸兄弟の笑いのつばを衝撃的なまでに刺激してしまつたとおぼしく、いっただけ大笑いされてしまいました。

え？ なに？ 名張市ってなに？ ばか？ 心底はか？ と大評判。この年秋に上京してお会いしたみなさんからは、なんか大変なとこに住んでるんですね、とか同情されちゃつたりなんかして。

あほさんたちの戦場

だからそんな昔のこといちいちほじくり返して喜んでんじゃねーよばーか、とおっしゃる向きもおありかもしれないんですけど、だからばかはおめーだつてつてだろうがばーか。

ばかにや理解できないかもわからんけど、この漫才にも記したとおり、おめーらばか「関係者全員あほですからながあほなことだながあほなことでないのか判断できないんです」つー状態なのな。

例のエジプトの看板も、あの前で写メを撮り、それを知人に送信して、さーここはどこでしょかー？みたいな感じで名張のまちをPRしまーす、つてのが狙いだったわけなんだけど、関係者にはそれがどんだけあほなことかゆーことすら判断できなかったのね。

で、あの看板関係者の背後でこそそこそこ絵図を引いとったのが、なにを隠そう伊賀の蔵びらき事業の残党のみなさんでした。虎は死して皮を残し、伊賀の蔵びらきは大失敗に終わってあほを残す。つか、残してんじゃねーよそんなもん。

そういえば、残ったあほさんが舞いあがり、私のウェブサイトの掲示板にのたくり込んできてくれたこともありましたっけ。最初の投稿はこんなんでした。

ようこそ

からくりの町 なばりへ

僕の計画は、非日常世界をここにつくることです。

スフィックスも怪人二十面相も、これから出てくるものも

非日常世界です。

君がこの掲示板で他人を名指しで、傷つけ遊んでいます

僕は、そういう弱いものイジメなる遊びはしない。

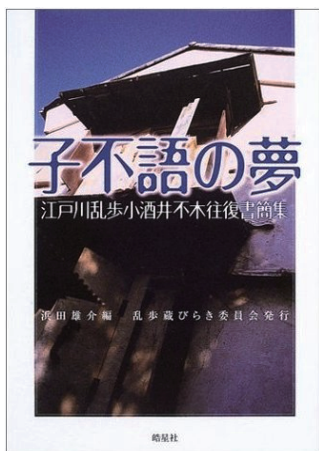
これからも、からくりの町 なばりを

楽しみにしておき給え。

新 怪人二十面相

な、面白いじゃろ。頭隠して尻隠さず。新怪人二十面相とか名乗って実名を隠してみたところで、手前は伊賀の蔵びらき事業でからくりのまちがどーたらこーたらゆうとつたあほでございまーす、といきなり問わず語りに打ち明けとるがな。

ま、ここまで壮絶なあほさんでなければ、名張のまちにエジプトの看板おっ立てましょー、みたいな超弩級の発想はとも望めないゆうことじゃろうな。



ちなみに、あほさんの面々が枕を並べて討ち死にしてくれた凄惨な戦場、すなわち私のサイトの掲示板は当時のログがいままそのままネット上に残ってます。「エジプトの怪人たち」でグーグル検索すればトップでヒットいたしますので、ひと味もふた味もちがう名張のあほさんたちを心ゆくまでご堪能ください。

それにしても、あの看板の衝撃には凄まじいものがありました。なにしろ前年十月には、伊賀の蔵びらき事業のなかでただひとつの成功事例だった『子不語の夢』が世に送られ、さすがは名張市、と関係各位から惜しめない拍手を頂戴していたところだったのに、あの看板一枚で名張市がとんでもなくばかな自治体だということがすっかりばれてしまったんだもんなあ。

とかいってたら、じえ。じえじえ。じえじえじえ。

インターネ
ット書店のア
マゾンで『子
不語の夢』、
つまりこの写
真の本を検索
してみただ
すけど。

じえ。じえじえ。じえじえじえ。

充実した情報を書籍の形で発信した『子不語の夢』にはその情報を受信してくれた多くの読者があり、たとえば『大衆文壇の巨匠たち』や『栗子さん』と二つの顔をはじめあちらこちらでお役に立ってるわけなんですけど、たぶんもう品切れだろうなと思ってアマゾンで検索してみたところ、「1点在庫あり。(入荷予定あり)」とのこと。増刷分がまだ残っているらしいのですが、購入ご希望のかたは消費税の理不尽きまわりない増税の前にはぜひお買い求めください。

そんなことはいとして、アマゾンにはカスタマーレビューという機能があり、読者が本のレビュー、つまり批評を自由に投稿できるようになってます。『子不語の夢』には二件のレビューが寄せられています。『子不語の夢』には二件のレビューは拝読してましたものの一〇年になつてもう一件投稿されていたとはつゆ知らず、じえじえ、と驚いてしまいました。

伊賀の蔵びらき事業で発信した情報がどんなふう受信されたのか、伊賀地域十八万人の善良な市民のみなさんに具体的にお知らせできる得がたい例証がゆくりなく見つかったことに鑑み、天下御免の無断転載に踏み切ることにいたします。

まず一件目。徳島県の北島町に職員として勤務しながらユニークな文化活動を展開して全国的に知られる小西昌幸さんによるレビューです。

貴重な往復書簡集に驚嘆せよ

2005/4/10 By 小西昌幸

■本書は2004年暮れの読書界の話題をさらった。「二銭銅貨」でのデビューまもない江戸川乱歩が先輩作家の小酒井不木（こさかい・ふぼく）に礼状を書いたのが1923（大正12）年7月1日のことで、不木は7月3日に返事を書く。それ以降両者は頻繁に文通を行なった。本書には1929（昭和4）年4月1日に不木が肺炎で亡くなるまでの両者の書簡（乱歩書簡33通、不木書簡120通）が収録されている■きちょうめんな乱歩は、不木からの手紙を一括製本し保管していた。不木に宛てた乱歩からの手紙は多くが散逸したが、それでもこれだけの手紙が残されたのはやはり奇跡的なことであるというまでもない。何しろ70年以上も前の資料なのだから■本書の原動力となったのは、三重県名張市立図書館嘱託の中相作氏の構想力・実行力と人徳によるところが大きい。

■数年前、骨董市場から不木宛ての乱歩書簡約30通が出て、それを心ある古書店主が保護し、成田山書道美術館で展覧されて話題になったが、中氏は周到な準備で本書の企画を仕掛け、とうとう書物の形として実現してしまったのだ■『子不語（しふご）の夢』という書名は、不木が乱歩に贈った書の言葉で、『論語』の「子不語怪力乱神」に由来する。往復書簡の面白さはもちろんのこと、驚嘆すべき脚注の分量、行き届いた論考・解説など、内容にまで踏み込むといくら書いてもキリがない。本書はとにかく本当に面白い。強く推薦するものである。

伊賀地域における評判こそすがしいまでに最悪なれど、出るところへ出れば私も結構おほめにあずかりたりしてゐるわけです。なんつったって、構想力と実行力と人徳があるんだもんな。わあっはっはっは。

ただまあ『子不語の夢』の場合、存分に力を発揮してくださったのは名張市立図書館を中心とした乱歩や探偵小説の関係者によるネットワークのみなさんで、私は乱歩と不木の往復書簡集を出版できるようお役所用語でいうところの環境整備を進めただけ、たいしたこととはしていないというのが正直なところですよ。

ばかな断念まぬけな脱退

つづいて、二〇一〇年のカスターマーレビューです。とりあえずお読みいただきましょう。

世界一の「江戸川乱歩リファレンサー」、中相作

2010/11/12 By 銀髪伯爵

本書の成果は云うまでも無く、超労作『江戸川乱歩リファレンスブック』3巻を上梓した中相作氏の力によるもの。

そこらの編者だったら、ただ書簡内容を並べて解説付けてハイ終わりになる処だが、さすがに役者が違う。

この本の濃密な情報量はどうかだ。

村上裕徳氏による縦横無尽な脚注が書簡の副音声となつて、当時の探偵小説文壇の状況・作家達の人間模様を見事に焙り出している。

デビュー時は謙虚だったのに、徐々に変化してゆく乱歩。その名声ぶりに嘔吐く前田河広一郎。

傑作を生み続ける乱歩を唯一脅かす平林初之輔の鋭い批評。小酒井不木の乱歩への深い敬愛ぶりに嫉妬の炎を燃やす国枝史郎。そして不木突然の病死の裏には、後の『真珠郎』を地で行く一人の男の存在があつた…。

村上氏の脚注を「独善的」と言う声もあつたと聞くが愚かな意見だ。大衆文学に通じた確かな書誌知識に基づいている上、中氏を中心に手練の者達が細かいチェックを加えている徹底ぶりなのだから。

巻末に乱歩／不木随筆・論考・解説・年表・索引。更に、凝りに凝った付属CD-ROMでほぼ全ての書簡画像さえ見ることが出来る。

これこそ書簡集の手本ともいいうべき素晴らしい一冊。

中相作氏にお願いしたい。再び村上裕徳氏と組んで『江戸川乱歩―横溝正史書簡集』を是非ともやって頂けないだろうか？

両雄相並ぶ偉大な探偵小説家なのに、乱歩に大きく遅れをとって正史に踏み込んだ良書は悲しい程にない。

もし実現したら本書以上の大反響になる筈だ。

中氏のラストワークとも云われる『江戸川乱歩年譜集成』同様、喉から手が出る程に読みたいのである。

銀髪伯爵さんのことはまったく存じあげないのですが、遅ればせながら深甚なる謝意を表する次第です。

だけんじよ、なにからなにまで終わってすまっただべなあ。とくに完全に終わってすまっただのが名張市立図書館で、銀髪伯爵さんのレビューでもご紹介いただいてますけど、乱歩の目録三冊も出して、その筋のみなさんからやんややんやの大喝采をいただいておったちゅーのに、なすてこげなざまになつてすまっただ？ と不審にお思ひのかたもいらつしやることでしょう。

しかし、実際にはもともとそんなざまだつたわけではあり、そのあたりのことはこの漫才の後半で鋭く厳しく追及する予定ですからここまでとして、以下、まちなか再生事業の流れを追っておきます。

二〇〇六年 名張まちなか再生委員会、迷走。

二〇〇七年 六月、名張まちなか再生委員会定期総会で名張市が乱歩文学館の整備を財政難のため断念すると発表。

二〇〇八年 六月、細川邸を整備したやなせ宿がオープン。

二〇〇九年 二月、栲田医院第二病棟跡地に乱歩生誕地碑広場が完成。六月、名張まちなか再生委員会の定期総会、開催に至らず。九月、名張市が名張まちなか再生委員会から脱退し、名張まちなか再生委員会が解散。まちなか再生事業は中絶。

だからいつまでもそんな昔のこといちいちねちねちうじうじぐじぐじほじくり返して喜んでんじやねーよばーか、とおつしやる向きもおありかもしれませんが、私もつくづくそう思います。ほじくり返したつて腹が立つてくるだけなんだもん。ですが、名張市の乱歩騒動を語るためにはまちなか再生事業を振り返ることが不可欠です。ひきつづきおつきあいください。

とはいえ、ほんと、わけわかんなくね？ ここまでわけのわかんない展開に巻き込まれたんですから栲田医院第二病棟の話もまともに進むはずはなかつたんですけど、二〇〇七年六月三日付の毎日新聞ウェブニュースによれば、前日開催された名張まちなか再生委員会の定期総会は次のごとき惨状を呈したそうです。

続いて、事業計画案の検討に入った。乱歩関連施設整備事業で、生誕地の「旧栲田医院第二病棟」（同市本町）の解体工事費などに計950万円が計上された計画案に対し、出席者から「昨年度の計画案では乱歩文学館の整備が明記され、総会で承認もされた。変更に関し、なぜ何の情報もないのか」「市長が『乱歩』をどうしたいのかが見えてこない」などと不満の声が相次ぎ、承認が先送りされた。

総会后、同市の荒木雅夫・まちなか再生担当監は「予算の制約や、建設後の維持管理費などを考えると、市としては難しい」と話した。

ほらほら。名張市はまーたこんな大うそついていたわけです。財政難なんてそもそも最初っからわかりきってたことじゃねーかばーか、みたいな話はこの漫才の後半で鋭く厳しく追及することにしておりますのでここまでとして、話を先に進めましょう。

さて、二〇〇九年に名張市は名張まちなか再生委員会から突如脱退し、関係者や一般市民を啞然とさせることになるのですが、同年九月四日夜に開かれた名張まちなか再生委員会の理事会を報じる翌々六日付朝日新聞伊賀版の記事から引用。

名張市は、官民協働で同市の中心市街地の再生を進めるために設けられた「名張まちなか再生委員会」から脱退する方針を決めた。民間から参加している委員からは「市が主導で委員会を作りながらあまりに無責任」と強い反発が出ていて、今の市街地再生の行方にも影響が出そうだ。

正直いって私は、名張市という自治体がかくもあからさまに主体性を放棄し、見苦しく逃げまわるとは予想していませんでした。くそだぜ。さらに引用。

市は脱退理由として「委員会の最大の核である名張地区まちづくり推進協議会が抜け、実質的に事業の推進が困難になった」と説明したが、出席した理事は「今回の説明では全く筋が通らず、納得できない」「市は交付金を受けるために市民を利用しただけでないか」などと批判が相次いだ。「しかるべき機会を設けて、市長や副市長に説明を求めたい」とする意見が大勢を占めた。

名張まちなか再生委員会から名張地区まちづくり推進協議会のメンバーが大挙して退会したのは、じつは私がやなせ宿をめぐる委員会運営のインチキを指摘してやったからなんですけど、名張まちなか再生委員会のみなさんには組織運営つてのがどういいうものなんだか、まったくわかっていないみたいでした。

てゆーか、名張市にもそのあたりのことが全然理解できていなくて、だからこそしれつと脱退するなんて恥知らずな真似もできたのよね。しかしさすがに二〇〇九年九月の名張市議会決算特別委員会の問題になり、それが伊和新聞でくわしく報じられました。私のブログにその紙面を無断転載しておりますので、興味がおありのかたは「名張まちなかブログ いうべきことなどないの巻」でグーグル検索してみてください。

正調名張市役所首頭を聴け

名張市のまちなか再生騒動は心ある一般市民の目にどう映っていたのか。名張市の公式サイトに掲載されている市民の意見と市の回答を引いておきます。

まず、二〇〇九年五月十二日付の「名張市『まちなか再生プラン』今後は？」。

ご意見

名張市の「まちなか再生プラン」は、細川邸の改修と一過性のイベントと、なんら観光スポットにもならない「江戸川乱歩記念公園」くらいしか、見えないまま、基本目標と各種プロジェクトも推進されることなく、財政難を理由にして「頓挫」しているように思えます。

財政難の状況にあつて、名張市「まちなか再生プラン」の「今後の実現化と展望」について市民に公表されることを望んでいます。

回答

名張まちなか再生プランに基づき、これまでに次の事業を行ないました。

1. 初瀬ものがたり交流館（観光交流施設）整備（名張市旧細川邸やなせ宿）・・・平成19年度完成

2. 江戸川乱歩生誕地碑広場整備・・・平成20年度完成

3. 公共サイン整備（まちなか案内板・誘導板の設置）・・・平成19年度完成

4. 駅前公衆用トイレ整備・・・平成17年度完成

5. 水と緑のネットワーク事業（城下川沿い道路景観整備、太鼓門散策道工事）・・・平成20年度完成

今後は、「名張まちなか再生プラン」で示す豊かな自然や地域資源を活かし、魅力と賑わいのあるまちづくりを継続的なものにしていくためには、名張の独自性、名張らしさ取り入れる必要があるものと考えています。そのためには名張まちなか再生委員会或いはまちづくり関係団体と協力し、事業の推進を継続して検討してまいります。

引用ページのURLは「<http://www.city.nabari.lg.jp/hp/page000007300/hpg000007224.htm>」。

こんな回答、うそもいいところです。「事業の推進を継続し」とか書いてありますけど、十年がかりで進めるはずだったまちなか再生事業、半分の五年でうやむやになってしまって、はいおしまい、でこわした。

それにだいたいがこら、「名張まちなか再生プランに基づき」つつーのが大うそじゃねーか。

名張まちなか再生プランでは「初瀬ものがたり交流館」になるはずだった細川邸がいつのまにか無駄に立派な公衆便所つきの名張地区第二公民館でしかないやなせ宿になってしまいましたし、「江戸川乱歩生誕地碑広場整備」「公共サイン整備（まちなか案内板・誘導板の設置）」「駅前公衆用トイレ整備」「水と緑のネットワーク事業（城下川沿い道路景観整備、太鼓門散策道工事）」なんてのは名張まちなか再生プランにひとことも書かれておらんかった事業です。

しかもこら、財政難財政難といいながら、名張市はこの事業で三千万七千七百円がとこコンサルタントにぼったくられとったやないか、みたいな話はまたのちほど漫才の後半で、ということにして、同じく名張市公式サイトから二〇〇九年十月六日付の『『まちなか再生』事業について』をどうぞ。

ご意見

「5つのテーマのまちなか整備」は、今まで、多額の税金を投入して、

(1) 細川邸の改修しても、一過性のイベント開催場所になってしまったこと。

(2) 乱歩生誕の地を『何らの観光資源にもならない』公園にしてしまったこと。

(3) 路地裏の道路を整備したこと。

くらいで、財政難の上に「税金のムダ遣い」をした行政の不作為の印象があるだけではないでしょうか？

市民としても、「職員7人の引き揚げ理由」は「まちなか再生委員会理事会」への「事情説明」だけでの問題ではなく、市民への「説明責任」として、納得の得られるご説明（公表）をしていたきたたく、強く望んでいます。

細川邸を無駄に立派な公衆便所つきの名張地区第二公民館のやなせ宿として整備するための費用はざっと一億円だったんですけど、税金の無駄づかいを指摘された名張市の弁明はどんなであったか。

回答

名張まちなか再生委員会は、名張地区既成市街地の活性化や魅力あるまちづくりをめざして策定された「まちなか再生プラン」を指針として既成市街地の再生事業を円滑に進めるために平成17年6月に市や地元住民、商工団体、市民グループなど多くの団体によって設立されました。

国の交付金事業を活用して、まちづくりに活かされる事業に取り組み、平成17年度には、名張駅西口にあった公衆トイレの改修、18年度では、まちへの訪問者のガイドとなる案内看板や道標を駅前や藤堂邸前、城下川などに設置しました。また、19年度には、旧細川邸「やなせ宿」の改修や、榎田病院第2病棟の解体作業を行ない、まちづくりの拠点作りを行いました。

交付金事業の最終年度となった20年度では、乱歩生誕地碑広場としての整備を始め、車椅子でも太鼓門へ行ける散策道の整備や、梁瀬水路の中で最も景観の良い城下川沿いの道路修景整備を行いました。

まちなか再生事業については、これらの施設を活かしながら今後も地域づくり組織との連携や他団体との協働により、押し進めなければならないと考えています。

引用ページのURLは「<http://www.city.nabari.lg.jp/hp/page000008700/hpg000008699.htm>」。

市民からなにを指摘されてもいっさい非を認めようとせず、ひたすらその場しのぎに走るのがお役人つっもものだ、つっもことがあらためて了解されます。

さて、漫才三十ページのあとに地の文が十二ページつづきました。ここらでまた目先を変えて漫才に戻ることにいたしますが、景気づけに正調名張市役所音頭をスキヤットつきでお届けしておきたいと思えます。おにぎやかに拍手、よろしくどうぞおッ。

いくら田舎のお役所じゃとて

はあどーしたどしたあ

ずんずびずばーん

ばっばやーん

ここまであほではちよいと困る

はあそれからどしたあ

ずんずびずばーん

ばっばやーん

ちよいとどころかだいぶ困る

はあもつともだーあもつともだあ

ずんずびずばーん

ばっばやーん

ばっばやーん

ばっばやーん

それでは漫才の後半に入りますが、長くなること予想されますので紙幅節約のため笑いの要素は抑え気味にしてお送りいたします。よろしくどうぞおッ。

僕の図書館戦争

中 相作

どん百姓とくそ坊主

「こんにちはッ」

「こんにちはッ。で始まるそのパターンそろそろやめにしたらどうですか」

「お経は読んでも乱歩は読まぬッ」

「今度はなんの話ですねん」

「腹が張つても屁はこかぬッ」

「知りませんがな」

「名張市立図書館の初代館長でございますッ」

「どなたですねんそれ」

「資料収集のしの字も知らぬッ」

「こっちこそ知りませんがな」

「図書館法のとも知らぬッ」

「知らんゆうのに」

「さ」

「どないしました」

「檀家まわり行かさしてもらわさしてきやさしていただかさしてもらわしてこ」

「好きなようにしたらよろしがな」

「ほんにやはらみたほんまによ」

「ほんまにお経読むんですか」

「かんじざいぼさつほんだからよ」

「君しまいに名張市仏教会あたりから叱られますよ」

「ぎやーてーぎやーてーほんまによ」

「そのほんまによとかほんでからよとかゆうのがまたようわからんわけですけど」

「ごこうのすりきれほんでからよ」

「そんなん落語の寿限無ですがな」

「大きなお寺ができましたあッ」

「なんでいきなりお寺が出てくるんですか」

「ご親族のかたから順にご焼香をお願いします」

「いったいどこのお葬式ですねん」